

## 優秀修士論文概要

## バルザック作品における「もの」の移動

谷澤真優

## はじめに

本稿では、1830年から1832年にかけて出版されたオノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac) の中短編集『私生活情景』*« Scènes de la vie privée »* 第一版、第二版の作品において、登場人物たちによる物の贈与や譲渡が頻繁に描かれることに注目し、バルザックが登場人物たちによる物のやりとりがを通して描こうとしたものを明らかにすることを目的とした。

## 第1章

『毬打つ猫の店』*« La Maison du chat-qui-pelote »* をとりあげ、ヒロインの肖像画を巡る一連の贈与を分析することで、物がどのような点で重要性を持つのかを明らかにした。商人の娘オーギュスチヌをモデルとした肖像画は架空の画家テオドールの傑作とされ、作中でも芸術作品としてかなり高い価値を認められている。だが、本作品における肖像画の重要性は絵画芸術の価値とは別のところから生じている。テオドール自身が認める通り、肖像画はオーギュスチヌに対する画家の愛から生まれたものである。キャンバスに描き出された少女は決してオーギュスチヌそのものではない。それは画家の愛のまなざしが彼女のうちに見出すイメージであり、彼女を愛する画家のまなざしのイメージである。だからこそオーギュスチヌは美術館で自身の肖像画を見て戦慄し、そこに姿を現した画家の愛の告白に驚愕する。厳格で閉鎖的な家庭に生まれ、家族以外の人間や世間との接触をほとんど持たずに育ったオーギュスチヌは、肖像画を前にして初めて他者に出会う。他者の視線に。そしてその視線を通して初めて自分自身に出会う。絵の少女と自分を同定する—「これは私だ」。それと同時に、内面化された画家のイメージが彼女の自己イメージを構成する。画家から愛される自分、画家の愛のまなざしを受ける自分、—「これが私だ」。これが彼女の自己獲得の契機であることは言うまでもない。彼女にとって肖像画はテオドールに愛される自分のイメージであり、画家の愛のまなざしを受ける時、彼女は自分自身の内にこの絵の少女を見る。肖像画はオーギュスチヌの分身であり、オーギュスチヌもまた肖像画の分身となる。以上のように、この作品において肖像画の重要性は芸術作品としての価値から生じるのではない。問題になるのは、オーギュスチヌとの関係において生じる個別の意味、特別な価値である。だが、肖像画の意味は決して不変ではない。肖像画が別の人物の手に渡る時、そこには別の意味が新たに付与される。オーギュスチヌと念願の結婚を果たしたテオドールはしかし卑俗な妻に幻滅し、社交界で出会ったカリリアーノ夫人に関心を抱く。彼がこの愛人に肖像画を差し出すことで、テオドールの愛のまなざしは肖像画ごとカリリアーノ夫人の手に渡り、肖像画はテオドールからカリリアーノ夫人への愛を意味するものとなる。そしてオーギュスチヌの訪問を受けたカリリアーノ夫人が彼女に肖像画

を返却する時、これはテオドールに対する一方的な拒絶と侮辱を意味するものになる。一連のやりとりの中で、肖像画には常に新たな意味が付与されるのである。問題は、このような意味の変化が誰にでも理解可能ではないという点にある。オーギュスチヌスは肖像画を取り戻すことで夫の愛もまた自分に戻ると信じる。彼女にとって肖像画は変わらずテオドールからの愛を意味するものであり続ける。だからこそ、激高したテオドールによって肖像画が破壊されると、彼女は自分自身をどこにも見出すことができなくなる。肖像画はオーギュスチヌスにとって自分自身を意味するものであり、一連の贈与は肖像画に付与されたこの意味を別の意味で上塗りするのである。

## 第2章

第二章でとりあげた『ラ・ヴェンデッタ』《*La Vendetta*》にもヒロインであるジネヴラの肖像画が登場するのに加え、ジネヴラの遺髪も注目すべき重要なモチーフとして登場する。タイトルの《*La Vendetta*》はコルシカ島の復讐についての因習であり、ジネヴラとその恋人ルイジの一族同士がこれに基づいた仇敵関係であることから来ている。本章では、重要なモチーフであるジネヴラの肖像画と遺髪のやりとりが、この復讐の原理に基づくことを明らかにした。

まず『毬打つ猫の店』と同様、肖像画はモデルであるジネヴラ自身以上の存在であり、したがってルイジがこれを売ることで、ジネヴラの生も失われる。肖像画の売却において特に注目すべきは、息子バルトロメオの存在である。彼女は自分を勘当した父の名を息子に与えて愛を注ぐが、赤ん坊に乳を与えるジネヴラは肖像画の少女と同定不可能なほど衰弱した様子で描写される。その結果、ルイジの中で肖像画とジネヴラの等価性は失われ、彼は妻の生活のために肖像画を売却するが、『毬打つ猫の店』と同じく、分身の消失は彼女の死を招く。結果として、ルイジによる肖像画の売却は一族の復讐の延長にある。そしてジネヴラの遺髪が登場する時、ルイジとバルトロメオの因縁が明確な物として現れる。ジネヴラは髪を夫に切り取らせ、赦しの言葉と共にバルトロメオに届けるように言い遺す。ところが遺髪を手にしたルイジがバルトロメオに放つ言葉は、明らかに両家の因縁関係と復讐の連鎖を思わせるものであり、遺髪に込められた赦しのメッセージは、ルイジを経ることで復讐のメッセージに上書きされる。肖像画を売る、遺髪を届けるという次元において、復讐の原理が表れている。

## 第3章

第三章でとりあげる『ことづて』《*Le Message*》にも、遺髪を届けるという形式のやりとりが描かれる。この作品は一人称の語り手の回想に始まり、語り手が馬車事故で死んだ青年の遺言に従って、彼の恋人に死を伝えに行く旅が語られる。注目すべきは、「青年の死」というメッセージの伝達が物語の中心であるにもかかわらず、この伝達が登場人物たちの言葉によって描かれない点である。本章では、言葉ではなく、青年が語り手に託す物を通して死の伝達の過程を分析した。

重要なモチーフとして登場するのが青年の鍵、青年が恋人から受け取った手紙、そして青年の遺髪である。青年の遺言に従って、語り手は事故の拍子に青年の胸に刺さった鍵を抜き、彼の家からジュリエットの手紙を持ち出し、これを差出人である彼女に届けに行く。『ラ・ヴェンデッタ』の場合とは反対に、語り手を介して青年からジュリエットに届けられることによって、本来であれば共通したひとつの意味を持ちえない三つの物に、「青年の死」というひとつの意味が生じることが確認できる。

## 第4章

第四章では、『家庭の平和』*« La Paix du ménage »*を取り上げた。この作品ではダイヤモンドの指輪を巡る一連の贈与が問題になるが、その構造は第一章で注目した『毬打つ猫の店』とよく似ている。夫からスランジュ伯爵夫人への贈り物であったはずの指輪は、しかし夫自身の手によって彼の愛人に再度贈られ、この愛人からさらにその恋人へと贈られていき、最終的にスランジュ夫人への贈り物となる。『毬打つ猫の店』と決定的に異なるのは、指輪を取り戻したスランジュ夫人が題名の通り「家庭の平和」を再び見出す点にある。本章では、指輪の循環する過程を通して、この差異がどこから生じるのかを明らかにした。まずマルシャルがスランジュ夫人に指輪を贈るまでの過程において、彼にとっての指輪の意味が大きく変化している。当初、ライバルであるスランジュ伯爵から愛人を奪った勝利の証であった指輪が、スランジュ夫人に贈られる時は真摯な愛を意味し、彼自身に代わる物として差し出される。スランジュ伯爵から愛人ヴォードルモン夫人へ、ヴォードルモン夫人からマルシャルへの贈与においても、同じことが起きていたと考えられる。つまり、指輪は常に愛を意味するものであるものの、その愛は贈与の度に別の愛で上書きされている。重要なのは、スランジュ夫人がこのような贈与による意味の生成に無知でない点にある。ダイヤモンドの指輪には彼女の夫の髪が隠されており、したがってオーギュスチーナの肖像画と同様に、彼女にとって指輪は夫そのものであった。しかし、マルシャルから指輪を受け取った彼女がその髪を捨てるのは、一連の贈与の中で指輪に異なる意味が付与されてきたことに気づいたからだと考えられる。そして、髪を捨てることによって、指輪はもはや彼女にとっては夫と等価なものではなく、真に彼女の物となる。贈与によって物に付与される意味に気づき、自ら新たな意味を与える行為こそが、スランジュ夫人をオーギュスチーナと反対の運命に導いている。

### おわりに

各作品の分析を通して明らかになったのは以下の二点である。第一に、作品内で注目される物の重要性は、物それ自体の有用性や価値ではなく、個別の登場人物にとっての意味から生じている。これは、それまでの文学で注目されてこなかった「私生活」のありふれた光景に物語を見出す『私生活情景』全体の構造に一致するものであり、登場人物たちの手の間で見出される個別的な物の意味は、まさに「私的な意味」と言えるものではないだろうか。一方、このように物に付与される意味は不安定なもので、登場人物たちの間で認識の齟齬や欠如が認められた。バルザックが若者の陥りやすい失敗を敢えて描くことで反面教師的な見本にすると主張するのを信じるならば、物の受け渡しを介した人間関係の構築とその失敗は、こうした教訓的意義の反映である。以上の点で、各作品における物と登場人物の関係のやりとりという次元に『私生活情景』の大きな目的が現れているのではないだろうか。